

# 吉井源太と明治

《11》

# 薬袋紙の製造法

伝統的に、土佐でのみ漉かれた特別な紙、「薬袋紙」がある。

厳しい制限のもとにおかれた土佐藩の御用紙漉によって漉かれた紙のうちでも、最も特殊な紙だといえる。吉井源太はこの紙の製法に熟練の技を持ち、大切にしていた。

日本製紙論によると、薬袋紙は、江戸時代に土佐以外で製造や販売する事が、非常に厳しく禁止されていた紙であった。

禁を破って仙台で製造した人や、ひそかに大坂で販売した人などがあったが、これらはすぐに発覚して打ち首になったという。

このために他地方では、この紙について製造方法を知らないばかりでなく、こ

の名前を知る人もない。

薬袋紙は白色と黄色と褐色の三種類があり、貴族などの衣服を包むことや、医師の用いる薬を包むのが用途だった。この紙に包めば衣服の色あせがなく、また薬剤の香りも長い間決して失われることがなかったという。効力のある紙なので、一般の人が使う事は禁じられた。

毎年藩主より徳川氏へ、暮と年初に必ず献納され、これを「暮献上」、「春献上」と呼んだ。このように、大変な貴重品として取り扱われる紙だったのだ。

日記にもこの紙は何度か出てくる。製造方法がかなり詳しく説明されている箇所もあるので、今では貴重なものとなったその製法を

簡単に紹介しておこう。非常に褐色をしたものは、省略して「焦紙」ともいわれ、感じていただけれると思う。薬袋紙の内、焦色、つま

り褐色をしたものは、省略して「焦紙」ともいわれ、薬袋紙ではこれが一般的だったようだ。この作り方が



実際に使用されていた薬袋紙と薬類。時代不詳(いの町紙の博物館蔵)

日記に記されている。原料は雁皮。ゴミや汚れがないように、ここの精選した原料皮を木灰の灰汁で煮たあと、水で洗う。

またチリなどをよく除いてから布の袋をかぶせた桶に流し込んでよくかき混ぜ、その布袋を上げて三時間絞る。さらに圧搾器にかけて水がなくなるようにする。

この原料を、染料となる蘇芳という植物を煮詰めた液、それと、ヤマモモの皮を煮詰めてから木の灰汁を混ぜたものとともに漉槽に入れ、さらに硫酸鉄を加えてから漉く。

このようにするので、漉くときに真水は全く用いない。また、製造時は酒、煙草、蜜柑を近づけてはいけ

ないと書かれている。

非常に繊細な作業が必要で、大変な手間がかかったことがよくわかる。源太はこの紙を海外の博覧会や国内の共進会などの時に何度か出品した。何日もかけて準備している様子が日記に書かれている。また、「日本製紙論」に題辞を書いてくれた土方久元にもお礼としてこの紙を献上した。

源太は、薬袋紙の製造方法を習いたいといってくる人に指導しただけでなく、著書で広く公開した。源太は、明治時代に新しい紙を作りだすとともに、伝統的な紙を大切にし、守り伝えていくことにも心をくいだしたのである。  
(京大大学院研修員、京都府在住)